

釜かまの傍そばまで持つて來きました。

さあ蓋ふたを開あけろ、それ袋ふくろの口くちをあけると、二疋ひきがゝりて釜かまの上に逆さか様にした鶏にわとりの正しやうたい体たいは、はづみをくつて沸湯ふいゆの中にトブンと落おちこ込んだのを見みますと、思おもひもかけぬ眞黒まっくろな大石おほいしで、あつと驚おどろくひまもなく、お釜かまの底そこは打うち抜ぬかれて、ザーツと流ながれ出でました沸湯ふいゆは二疋ひきの狐きつねにすつかり懸かり、眞赤まっかに火傷やけどをいたしました上うへもう二度と再ふたび穴あなから外そとへ出でる事ことさへも出で來きなくなりましたと云いふ。

めでたし／＼

太郎さんと次郎さんの話

と よ 子

太郎たろうさんと次郎じろうさんとは、或ある夏なつの夕方ゆふがた仲なかよく二人ふたりで濱邊はまべを散歩さんぽして居をりました、涼すずしい風かぜがソヨ／＼と吹ふいてまゐりまして、何なんとも云いへないよい心こころもちで御座ございます、やがて太郎たろうさんと次郎じろうさんとは大おほきな松まつの木きの根ねに腰こしをかけ遙はるかに沖おき

合あひの方ほうをながめて居ゐりました、

すると突然とつぜんに次郎じらうさんは、海うみのむかうの方ほうから夕日ゆふひをうけて走はしつて來くる帆掛舟ほかけふねを指さしまして。

「マア兄にいさん、何なんと綺麗きれいな帆ほではありませんか、

まるで雪ゆきのやうに眞白まっしろく見みえます、あの布ぬのは何なんでせう？」

と尋たずねました、太郎たろうさんは之これをきゝまして、たゞ黙だまつて笑わらつて居をりました。

やがてその帆掛舟ほかけふねがだん／＼と濱邊はまべに近附ちかづいてまゐりました、近づいて見みますと、こはいかに次郎じらうさんの雪ゆきよりも白しろいと思おもひました帆ほは、見みるからにきかない、方々ほうくにつきが一いばいあたつてゐます、どす黒くろい布ぬのでありました、次郎じらうさんは之こを見みまして、たいそう喫驚びつくりいたしまして、

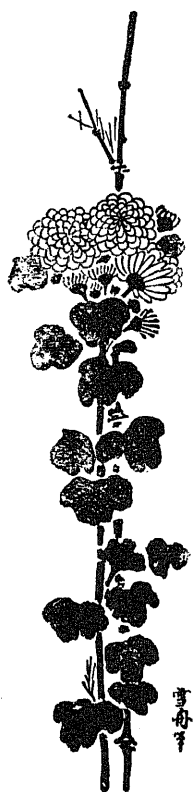
「マア兄にいさん、なんときたない帆ほなのでせう、方々ほうくにはつぎが一いばいあたつてゐますし、色いろはどす黒くろでまるで御おへつつい様さまにはいつてゐた白猫しろねこみたやうな色いろですのに、どうして先刻さつきはあんなにきれいに見みえ

ましたのでせうか」

と、不思議そうに太郎さんにきゝました、太郎さんは、

「それは先刻は遠方ではあるし、夕日をうけてゐたのであんなに眞白に綺麗に見えたのです、ですから物事は何によらず、充分に觀察し充分に研究した後でなければ決して判斷は下すものではありません、そばで見ればこんなに汚れてきたならしい帆でも、遠くでは先刻のやうに美しく見えます」

と教へました。



すずく